聖隷おおぞら療育センター
〒433-8558 静岡県浜松市中央区三方原町3453
TEL 053-437-1467

おおぞら

http://www.seirei.or.jp/mikatahara/oozora/

社会福祉法人 聖隷福祉事業団
医療保護施設・地域医療支援病院
総合病院 聖隷三方原病院
SEIREI MIKATAHARA GENERAL HOSPITAL

第228号
2026年10月1日発行

発行責任者 山 本 貴 道
編 集 者 木 部 哲 也

「入所者の居住空間を考える」

生活支援課課長 兼 副所長 田口 結実

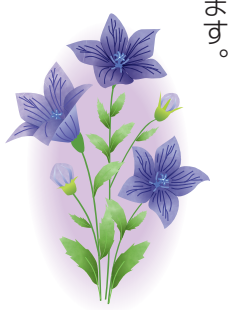
「生活の場」と聞くと、多くの人は家庭や自宅での暮らしを思い浮かべると思います。家庭では、一人で過ごす時間と家族と過ごす時間を、その時々の気持ちや状況に応じて自然に選択しています。しかし入所施設では、特に重症心身障害のある入所者にとって、その時間や場所を自ら選択することは容易ではありません。そのため、私たち職員が、その人にとってよりよい生活環境を考え、整えていくことが求められます。今回は、入所者が昼間を過ごす「リビング（居住空間）」について考えてみたいと思います。

おおぞらでは、多くの入所者が昼間は居室を離れ、リビングで過ごしています。これは単に生活の場を移すということではなく、家庭生活に例えるなら、自室から家族のいる居間へ、さらに地域や社会へ出ることに近い意味を持っていると考えています。新型コロナウイルス感染症の流行下では、感染対策を優先した結果、リビングは「社会」というよりも「家の茶の間」のような空間になりました。しかし現在は、実習生や見学者の受け入れが再開され、面会もリビングで行われるようになり、再び多くの人が行き交う場へと戻ってきました。リビングは、入所者にとっての「社会」としての役割を取り戻してきたように感じています。

リビングを「社会」と捉えたとき、私が大切だと考えている視点は二つあります。一つ目は、「他者との距離」です。リビングには、他の入所者だけでなく、職員、短期入所利用者、面会者、実習生、見学者など、さまざまな人がいます。見学者や自分と直接関わらない実習生は、街ですれ違う人のような存在かもしれません。しかし、そのような人との距離についても、入所者が安心して過ごせるよう配慮することは大切です。また、日常を共に過ごす入所者同士の距離も重要です。感染対策では十分な距離を確保することが求められましたが、「社会」としてのリビングを考えるなら、人の存在を感じられながらも、不快にならない距離を一人ひとりに合わせて考える必要があります。おおぞらの小児のリビングでは、子どもたちが自然と集まり、互いに寄り添うように過ごす姿がよく見られます。一方、成人のリビングでは、近くにいても一定の距離を保ちながら過ごしている印象があります。年齢や身体の大きさ、発達段階によって心地よい距離感は異なることを、日々の様子から感じています。

二つ目は、「一緒に過ごす人数」です。私たちは自分の周囲にいる人の存在や活動を意識しながら生活しています。入所者の皆さんも、近くで行われている他者のやり取りや活動によく耳を傾け、関心を示していることがよくあります。テレビの映像や音声よりも人と人との関わりに興味を持って見聞きする方は少なくありません。そのため、その人がどのくらいの集団で過ごすことが心地よいのか、どの範囲まで周囲を意識できるのかという視点も、居住空間を考える上で重要になります。個別に考えれば、利用者同士の相性や、小児であればどのような経験を積み重ねてほしいのかなどその人らしい生活を支えるために考えるべきことは数多くあります。

日々入所者と関わり、その方の興味・関心について丁寧に見つめていくことで、「この人にとって心地よい居場所」が少しずつ見えてきます。その居住空間を考え、形にしていくことも、私たち支援者の大切な専門性の一つだと考えています。「なぜリビングで過ごすのか」「そこでどのような生活を提供したいのか」・・これからも職員一人ひとりがその問いを持ち続け、入所者にとって安心でき、豊かな社会とのつながりを感じられる生活空間をつくっていきたいと思います。



こだま利用者の個別活動

鈴木　佳須美

Aさん（4歳）と活動の中で小豆を使った感触あそびを行いました。小豆を入れたトレイに手を入れると、じっと触れています。職員が小豆に触れたり上から落として音を立てるとだんだんと左手を動かし始め、手を大きく左右に動かして触れたり、小豆をつまんだりして感触を楽しんでいました。右手で小豆の入ったトレイを握って大きく傾けて音を出していることもありました。入所したばかりの頃は手に何かが触れることが苦手で、触れると手を引っ込めたり手のひらを開いたまま力を入れたりする様子が見られていましたが、活動で感触あそびを行っていくうちに、徐々にものに触れることに対して慣れてきたようです。現在では、近くにあるキラキラテープを手を伸ばして取り、指でつまんで指をこすり合わせるようにして感触を楽しむような姿も見られています。また絵本あそびでは、『はみがきしゅわしゅわ』『まんまるおはよう』など様々な絵本を読んでいます。うつ伏せの姿勢で過ごしているところで隣に行き、『がたんごとんがたんごとん』を読みました。本を開くと挿絵が描かれている方のページをよく見ています。ページをめくり、絵が下の方に横並びで描かれていると、顔を左右に動かして挿絵を見ていました。挿絵を見て楽しむだけでなく、「がたんごとんがたんごとん」など響きの面白いフレーズが繰り返し出てくると、それを聴いて表情を緩めていることもありました。

Bさん（5歳）は入所したばかりですが、周りの音や声をよく聞いており表情を緩めたり声を出して笑う様子が見られています。絵本あそびで『だるまさんが』を読みました。繰り返し出てくる「だるまさんが・・」のフレーズで目をキョロキョロさせたり、笑ったりしていました。その後に続く「どてっ」「びろーん」などの擬音語のところでは真剣な表情で聴いています。「だるまさんが・・」という一定のリズムのフレーズが面白いようでした。

AさんとBさんは、お互いを感じられるように日中リビングでは近くで過ごすように環境を整えています。持っている玩具の音やお互いの声などを聴いている様子や近づこうとする様子が徐々に見られ始めています。今後も個々の活動の中だけでなく、同年代の他者の存在を感じたり一緒にあそびを行っていく中で成長発達を促していけるよう、支援をしていきたいと思っています。

あさひ夏の音楽会

岩塚　日奈

8月に通所あさひ主催で夏の音楽会を行いました。コロナ禍で大勢が集まっての行事ができていなかったため、あさひの企画係が中心となり、利用者とご家族が一緒に楽しむことができる音楽会を企画しました。楽器演奏ができる職員が数名集まり、それぞれ得意な楽器を担当し、自主練習と合同練習を重ねました。また、制作が好きな利用者数名と、活動時間を使って「どんな飾りにしようか」「どの色がいいかな」など、職員とやりとりをしながら考えて作りました。活き活きとした表情で制作に取り組み、役割を担う喜びや満足感を得られているようでした。

当日は、あさひ利用者とご家族だけでなく、児童発達支援の児童、放課後等デイサービスの児童、入所利用者も聴きに来て、ホールいっぱいの観客となりました。

さあ、音楽会の始まりです。まずは、あさひ職員による「浜辺の歌」「ひょっこりひょうたん島」です。音楽に合わせてプロジェクターを使ってアニメの映像を流しました。ご家族からは懐かしいと声が聞かれました。2組目はボランティアによる三線の演奏です。沖縄などで使われる楽器とあって「島唄」などの沖縄民謡です。音楽に乗って沖縄の伝統的な踊りを真似るように両手を挙げて手首を回すように動かし音楽に乗っている人、聴き入っている人など様々です。3組目は職員とボランティアのユニットによるギターとカホンの演奏です。「南の島のハメハメハ」と「夏色」です。「南の島のハメハメハ」では、職員がダンサーの衣装を着て、フラダンスを踊り、花を添えました。「夏色」では、テンポのよいリズムに会場も手拍子をして盛り上がりました。日常的にグループ内で演奏会を行っています

が、今回、あさひ全体での企画としたことで、普段見る表情とは違う利用者、ご家族の姿を見ることができました。最後はアンコールの声が聞かれ、大盛り上がりの会となりました。

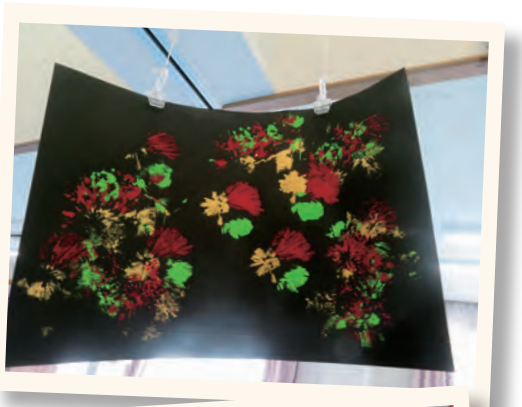
後日、ご家族から「生演奏よかったです」「家とは違う表情がみられて嬉しかったです」「またやってほしいです」など嬉しい声が聞かれました。楽しんでもらえる会となるようチームで取り組み、利用者やご家族の笑顔あふれる会となったことは嬉しく思います。これからも利用者が楽しい時間となるような活動、企画を考えていきたいです。

ひかりの子の夏の療育

ひかりの子では朝の会のあと、リハビリスタッフが提供する体操の時間があります。7月は、ビー玉を入れた袋に絵の具をつけて黒い画用紙に色つけする手を使う取り組みと、海に見立てたシーツに乗って揺れを体感するシーツブランコでした。色つけでは、子どもたちがその日に使う絵の具の色を選び、一人ずつ画用紙に色をつけていきました。絵の具のついた袋を紙にゆっくりぎゅっと押しつける子、ポンポンとたくさん色をつける子など、子どもが思い思いに自分の手を使って色をつけました。みんなが色づけした画用紙は、まるで花火のようでした。

シーツブランコは、みんな大好きな遊びです。はじめは揺れにびっくりする子もいましたが、徐々に慣れて自分でも体を揺らしたり自らシーツに横になりに行ったりする子もいました。

夏の時期、ひかりの子ではプール遊びを行いました。熱中症警戒アラートが出ているときは室内で、暑さが和らいだ日には外でプール遊びを行いました。水の中で体を揺らされてリラックスしている子もいれば、水の中で自らバタバタと手足を動かしたりおもちゃで遊んだりしておおはしゃぎの子もいました。夏の暑い日のプールは気持ちよく、また大胆に全身を使って遊べるため、夏の大人気の遊びです。



リレーエッセイ

旅行の楽しみ

リハビリテーション部
日比野　光里

私の趣味は旅行です。国内旅行も好きですが、特に韓国が好きで、これまで何度も訪れています。韓国では、街を散策したり、現地のおいしいものを食べたり、日本とは少し違った雰囲気を楽しんだりしています。また、好きなアーティストのライブを見るために韓国へ行くこともあり、ライブと旅行を一緒に楽しめることも魅力の一つです。

韓国に行くと、毎回楽しみにしているのが「BETON」というパン屋さんです。ここの塩パンがとても好きで、韓国を訪れるたびに立ち寄っています。旅行先でお気に入りのお店を見つけることも、私にとって旅行の楽しみの一つです。

旅行の計画を立てることも好きで、行きたい場所や食べたいものを調べながら「次はどこに行こうかな」と考えている時間からわくわくしています。これからもいろいろな場所を訪れて、新しい発見をしたり、お気に入りの場所を増やしたりしながら、たくさんの思い出を作っていきたいと思います。

あそびのむし

認定ＮＰＯ法人 芸術と遊び創造協会／東京おもちゃ美術館が行っている「あそびのむし」事業で配布されるおもちゃセットをいただきました。二つの大きなボックスに詰められた42点のおもちゃは全て、重い障害のあるお子さんたちが、安全に遊びやすく、楽しめるようなものばかりです。この事業で配布される玩具セットには、「病気や障害がある子どもたちにとっても遊びは大切で、すべての子どもたちに「好きな遊びで夢中になる」経験をして欲しい」という法人さんの想いが込められています。利用されている方たちにたくさん遊んで、楽しい経験をしていただきたいと思います。

おおぞら食事紹介

「ハロウィンのかぼちゃ」

かぼちゃはβカロテンを豊富に含み、色鮮やかな黄色は食卓を明るく彩ります。

ハロウィンの時期には、ランタンとして街で見かける機会も増えます。

日々の食卓にも取り入れやすく、定番の煮物はもちろん、スープやサラダ、プリンなどのおやつにも幅広く活用できます。

当施設でも毎年ハロウィンに合わせて、特製のかぼちゃプリンを提供しています。普通食の方から嚥下機能が低下したペースト食の方まで安全に美味しく召し上がり、秋の味覚を楽しんでいただければ幸いです。

栄養課　管理栄養士：白井

苦情解決委員会

2026年4月～2026年6月
期間中公表を希望される苦情は
ありませんでした。
（期間中、受付した苦情0件でした）

	5月	6月	7月
ショートステイ 利用者数（延べ利用日数）	53人（246日）	53人（258日）	58人（280日）
放課後デイ 利用者数（延べ利用日数）	88人（22日）	101人（25日）	107人（24日）
実習者数（グループ数）	2人（2グループ）	1人（1グループ）	0人（0グループ）